

Title	ポール・ベニシュー 『預言者の時代』にみる二つの自由主義 : 政治思想と方法
Author(s)	杉本, 隆司
Citation	一橋論叢, 135(2): 342-350
Issue Date	2006-02-01
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	<a href="http://doi.org/10.15057/15610">http://doi.org/10.15057/15610</a>
Right	

ポール・ベニシュール『預言者の時代』にみる二つの自由主義

——政治思想と方法——

杉本隆司

はじめに

ポール・ベニシュール(一九〇八—二〇〇一)の『預言者の時代——ロマン主義時代の学説』(一九七七年)が刊行されてから三〇年近くの歳月が流れた。この書は不思議に日本ではあまり注目されることはないが、フランスでは一九世紀初頭のフランス社会思想、ロマン主義研究においてすでに古典的地位を確立し、現在においてもなおその領域での基本文献としての地位を失っていない。

ベニシュールの主な著作を一通り見てみれば分かるように、『預言者の時代』は彼の諸著作のなかでも少々異質な立場を占めている。民謡に関するスペイン語で書かれた二編の

研究を除けば、それ以外の主な著作、『偉大な世紀のモラル』(一九四八年)、『作家とその仕事』(一九六七年)、『ネルヴァールと民謡』(一九七一年)、『作家の祭典』(一九七三年)、『ロマン派のマジたち』(一九八八年)、『脱魔術化の学派』(一九九二年)、そして『マラルメに倣って』(一九九五年)は、ベニシュール本来の研究領域であるといふべきフランス文学の諸著作をその研究の対象としている。それにひきかえ、この『預言者の時代』は文学研究・文芸批評というよりもむしろ、フランス一九世紀前半の政治思想、哲学、そして社会学説に自らの関心を集中させている。これは「本業」を離れた単なる脱線的な関心などではなく、ベニシュールが意識的に選択した研究方針である。確かに、この書は一九世紀フランス・ロマン主義のなかに世俗的な精神権力の成立をみいだそうとする彼の二〇年来の研究態度の一環をなしていることに違いない。伝統的秩序の崩壊と世俗的社会的誕生を背景に、ブルジョワ社会への同化を拒否する作家や詩人たちが懐いた「責務」、つまり世俗的聖職者階級の形成という政治的分割を超えた共通のロマン主義的意識の解明を目指した前著『作家の祭典』、そしてそこで展開された「文学による宗教の没収」というテー

マの延長線上に、この書が位置づけられていることは容易に見て取ることができる。しかし、この書物の執筆のもう一つの特徴な動機となったものこそ、二〇世紀の社会主義・共産主義にまつわる諸問題である。政治的次元でいえば当時の社会主義諸国の現実であり、理論的次元でいえば可視的・不可視的な精神的権力を背景にしたドグマ学説による社会の支配である。したがってこの書物は、ベニシュエーが「ロマン主義の時代」と呼ぶ一九世紀前半のフランスの思想家たちの学説を扱いながらも、彼の問題意識は二〇世紀の我々の問題（少なくとも一九六〇年代から一九七〇年代にかけての西欧が抱えていた諸問題）をも考察の視野に入っていたことを忘れてはならない。「一五〇年前の諸問題は、同様に大部分において我々の問題でもある」（[P.566]）。

『預言者の時代』でベニシュエーは、一九世紀初頭に勃興してきた自称科学的社会学説（特にサン・シモン主義とコント）を特に問題とし、彼が「擬似科学的ユートピア思想」と呼ぶこのような思想の延長線上に現代のマルクス主義の諸問題を位置づけようとした。したがって、『預言者の時代』はロマン主義の研究書である以上に、フランス政

治文化の形成を扱った政治学の書でもあり、このようなベニシュエーの研究構想と彼の二〇世紀的な問題意識は、論争的な彼の政治思想の立場をも我々に明らかにしている。だが、これによって単に彼の政治思想の立場が明らかにされるだけではない。同時にこの書物のなかで働いている、テクストに対する彼の方法論とも、彼の政治思想は極めて密接に繋がっているからである。つまり、政治思想と方法論を貫くもの、それは広い意味でのリベラリズムの立場である。この政治思想と方法論といういわば「二つの自由主義」は、二つの敵に対応している。それはユートピア政治思想であり、またそれが唱える方法論——さらにいえば社会科学（人間科学）そのもの——である。ベニシュエーが描くこの二つの「対決」を通して、彼が主張する一九世紀フランス・ロマン主義の遺産と、現代批評に向けられた彼の疑念について一瞥することにした。

## 一 政治思想

先に述べたような第二次大戦後の共産主義・社会主義に対するベニシュエーの失望と批判は、当時としてはそれほど珍しくはない。マルクーゼ、イッガース、ハイエク、リヒ

トハイムらによる批判のうち、その代表的な考えが認められるであろう。例えばリヒトハイムはこう書いている。

「公平に見ても一八二〇年から一八五〇年にかけてロマン主義運動の勃興期ヨーロッパを揺さぶった新しい政治あるいは社会思想は、実質的には全てサン・シモン主義に源を発しているというべきであろう。マルクスがサン・シモンの思想を丸ごと継承したとすれば、コントもまたそうした。

第一次大戦と第二次大戦の間の時期にも、フランスとドイツの主要な産業家たちの間ではサン・シモン主義の復活が見られた「…」。今日、『アフリカ社会主義』とか『アジア社会主義』として知られている、スターリン主義的共産主義も毛沢東主義も受け入れていない地域に支配的な政治形態は、たいていサン・シモン主義の一変種であり、これは伝統的な意味では社会主義であることもできるがそうである必要もない産業革命のイデオロギーなのである」<sup>(4)</sup>。

このような主張は、この時代の政治的・社会的問題に対するベニシューの問題意識とほぼ重なっている。しかし、彼のロマン主義に対する見方は、「産業革命のイデオロギー」というレットテル以上にもっと広く深い射程をもつ。それは第一に、すでに述べたように、キリスト教権力を基

盤とした旧体制から革命後の一九世紀初頭のロマン主義運動へと至る近代化の動きを、世俗的な精神的権力への社会的渴望という枠組みのなかで捉えようとしている点にある。

したがって、古典主義や一八世紀啓蒙主義への反逆というロマン主義理解の一般的な前提は、ベニシューのロマン主義研究、少なくとも彼が問いの対象としたフランス・ロマン主義に関しては、大きな問題設定とはなりえない。これと関係して第二に——ここで特に問題としたい点だが——、ロマン主義の中に精神的リベラリズムの流れをくみ取るようにする努力が明確に現れている点である。なるほど、ベニシューによればリベラリズムも含めて反革命学説からサン・シモン教やコントの人類教、そしてミシュレのユマニスムにいたるまで、この時代のほぼ全ての思想・政治・文学の諸運動は、ロマン主義の名の下に一括される。『預言者の時代』の各章がそれを告げている。つまり、第一部「リベラリズム」、第二部「ネオ・カトリシズム」、第三部「疑似科学的ユートピア思想」、第四部「ユートピア思想から人道的デモクラシーへ」、そして第五部「ユマニスム運動」である。いろいろな学説の違いにもかかわらず、「自由、進歩、理想の聖性、科学の体面、神への信仰、そして

人間の未来の宗教といったものは、程度の差こそあれ、誰も認めた諸価値なのであって、絶対的には誰も放棄してはいない」(T.P.II) であり、これらの思想が全く排他的な対立関係にあったと考えるのは「はなから間違い」である。むしろこれはロマン主義内部の争いすぎず、どの学説もその学説自体を提示する聖職者階級、詩人や芸術家に対して格別な地位を付与していたのであり、全体的にはどれもその時代の息吹を吸収した一体的な関係にあったものと見なされねばならない。これこそ、「ロマン主義の時代」と彼が呼ぶ一つの時代を形成する。

しかし、この著作全体を眺めれば、精神的リベラリズム、あるいはユマニスムと自らが呼ぶ立場にベニシューが共感を寄せ、そしてこの書が扱っている数々の著作そのものがこの立場から一貫して解釈が加えられている——これは彼の方法論にも関わることだが——ことは明らかである。一九世紀フランス自由主義思想は、一般的に社会主義思想に比して思想史研究においてわずかな地位しか占めていないにもかかわらず、ベニシューの強力な主張はリベラリズムあるいはユマニスムをロマン主義時代の中心的学説として扱っている点である(この視点はトドロフやゴージエの最

近の一九世紀フランス・リベラリズム研究の基本的態度のうちにも看取できよう)。その一方、彼の批判は、「科学的主張をもったユートピア思想」に集中している。「批判的自由とドグマの間の、失われてはいないこの一般的な議論の諸要素」(T.P.II)がこの書物の構成をなすのである。

ベニシューによれば、「文明における個人の権利の全般的規定」を保証するこの精神的リベラリズムは、経済的リベラリズムとは明確に区別されるものであり、生産と交換の学説にのみ依拠するマルクス主義者たちが陰に陽に無視してきた重要な遺産である。この考えは彼自身が著作の冒頭で与えたこの用語の広義の定義へとさらに接合される。「王政復古下、リベラリズムという名で呼ばれたものは、政治的自由の学説に限られない。もっと広く言えば、それはフランス革命から生じた体制や諸価値への賛同であり、且つ復古王権による旧社会への保守的回帰に対する反対である」(T.P.II)。これはこの時代のロマン主義者に共通する精神的特徴であり、さらに言えば帝政の理想化とも結びついているものである(ユーゴーやデュマですらそれに漏れない)。それゆえ経済的リベラリズムと精神的リベラリズムを混同しながら、両者を非難すべきではないのである。

「フランス一九世紀的観点」である精神的リベラリズムは、コンスタンはじめ革命後の自由主義思想家たちのなかに見いだすことができる。この時代、精神的リベラリズムはドグマ主義学説と対決の渦中にあった。つまり、自称科学的ユートピア思想、ネオ・カトリシズムとの対決がそれである。これらドグマ(特に、人類の目的を未来に設定する目的論的歴史哲学)に対するベニシュューの批判は、これらの主張が「客観的」科学と「主観的」願望、当為と必然、存在と価値を混同するという点にある。これは当然のことながら一九世紀のドグマ思想に対してのみならず、二〇世紀の「新しいドグマ」、マルクス主義に対する批判である。「幸福とか社会的調和とかいったこのような曖昧な目的を、普遍的に、ゆえに客観的に探求されるものとして想定しながら、この領域における科学の無力さを救おうと主張したり、あるいはそれを実現する科学的条件を定式化しようとしても無駄である。[...]ゆえに、軽率で不当なものしか、社会的目的の客観的定式は存在しない。当事者—人間の主体—こそが、この領域で発言権をもつのである」(H. P. 567)。この主張は、この書物のどこを開いても散見される彼の批判的な切り口であり、また彼の信念でもある。「客

観」科学は、目的選択においては人間の自由意志には介入できないし、客観的な科学的認識は目的を設定できない。ヴェーバー、ハイエク、ポパーらを想起させるこのようなベニシュューの批判は、一般的に方法論的主観主義の延長にあるといってよい。だが、彼が「こういう考えの人たち〔コントとマルクス〕により宣言された社会科学が科学の名に値するとは、これら諸条件からするとかなり疑わしい」(H. P. 264)と述べる時、彼の批判は社会科学の科学としての資格さえも懐疑にかけてゆく。これは政治思想を越えてベニシュュー自身の方法論にも通底するものであり、また同時にそこから導かれる帰結でもある。

## 二 方法論

すでに観たように、ベニシュューのリベラリズムは政治思想に限られない。これは彼が諸著作を扱う際の大局的な方法論的枠組みでもあるからである。とはいえ、彼には明確な方法論を用いる意志がない。これはかつてマルクス主義者を自認していたベニシュューが、処女作『偉大な世紀のモラル』以降、マルクス主義を離れたことと関係している。つまり、文学的著作に対する文学外部からの方法の導入、

そして安易な唯物論的還元主義の拒否である。例えば、一九世紀のフランス自由主義を解釈する場合、通常、還元主義に抛れば、それは当時勃興してきたブルジョワジーの思想的代弁と見なされる傾向にある。だが、「リベラル哲学はブルジョワジーが勃興する以前にすでに形成されていた。いかにこの哲学がこの階級にとって好都合なものであったとしても、この哲学はこの階級とは相容れないような価値学説を形成していたのである。[...]だから、危なかつしい還元で用心してこの哲学を理解する必要があるのだ」(T.P.33)。それゆえ仮に彼に方法があるとすれば、それは逆に徹底的に文学という世界、作家の思想の内部に入り込むという方法である。このような決定論の否定は、当然のことながら作家たちの意識、著作の自立性を最大限に認める方向へとベニシュエを導く。『預言者の時代』で彼が論証を目指したものの一つこそ、純粋学説・教義からの詩人・芸術家の自立性であった。

だが、このような彼の主張は、社会からの詩人・芸術家の完全な自律性を主張することではもちろんない。社会・政治関係から完全に独立した存在はありえない。むしろ、ベニシュエのロマン主義研究の功績は、ロマン主義といわ

れる運動が文学的・芸術的潮流に限られるものではないことを明らかにしたところにある。したがって、より正確に言えば、決定論的還元主義を否定しながら、世代ごとの社会・政治・文学が醸し出す全体的な雰囲気重視した一種の相互影響論を彼は展開する。彼は時代のイデオロギー(「社会の要求」と著作との関連に関心がある。<sup>6)</sup>「私は社会的要求と文学的の回答の出会い場を求めてきた。[...]経済も、社会・歴史的科学も、それが我々の研究にとっていかに有益だとしても、この場を与えることはできない。この場は著作の中にあるからだ」<sup>7)</sup>。それゆえ、有名無名の大量の文献収集が彼の著作の大きな特徴をなしているが、これはその時代・その世代のイデオロギーを探るための一つの方法である。トドロフによれば、ベニシュエのロマン主義研究は、実に二〇年の歳月が払われ、そして驚くべきことに彼は一七六〇年から一八六〇年までのフランスで行われた文学領域の出版物のほぼ全てを読んだ<sup>8)</sup>。できる限り多くの情報を集め、最大限に著者・作品の内部にまで入り込み、そしてそこから最終的に妥当な解釈を引き出す。素朴といっても良いこのような方法自体が、疑似科学的ユートピア思想の「方法論」、つまり科学の名の下に

自由検討を放棄するドグマ的な「アプリアリ」な方法論とは異なるのである。トドロフが皮肉なしに「解釈学的オペティミスム」<sup>(9)</sup>と呼ぶこのベニシュエの方法は分析的であると同時に、著作に徹底的に依拠し、それとの絶え間ない対話の中に自らの批評を晒すという意味において、弁証法的方法でもある。

ところで、時代のイデオロギーを探るベニシュエのこのような姿勢は、ある種、アナール派のマンタリテ論<sup>(10)</sup>、さらにはフーコーの方法論に近い印象を受けるが、ベニシュエの文学批評の方法は明らかにいわゆるポスト構造主義批評とは一線を画す。というのも、現代において主流を占める新批評に対して彼が下す診断によれば、実はそれらは疑似科学主義ユートピア思想の延長線上——彼が社会学的批評と呼ぶもの——に位置づけられるからである。「社会科学に陶冶されてしまった」現代の新批評は、人間性の否定、作品の軽視、作家の意志の否定、そして文学作品のドグマへの従属を特徴としているのであり、これらはベニシュエにとっては傲慢以外のなにもでもない。著作が語っているものとは異なる「隠された意味」を探し求め、その著者がそこで提起したものと別なふうに解釈するのではなく、

作家・作品、つまり創作者の意識とその所産を忠実に尊重せねばならない。「注意されたい！創作者たる自己は、伝統に対する彼の自覚的意識からして、そして彼がもたらす独自性からして、やはり最後の言葉を握っている。これは否定できないことであり、否定すれば絶対的な社会学的ドグマ主義に陥ってしまう」<sup>(11)</sup>。元来、主観的である領域を客観的に捉えるべきでない。ジャンセンはベニシュエの背後にフッサール思想の影響を指摘しているが、直接にはレイモン・アロンの知的系譜に位置づけられるであろう彼の姿勢は、一種の「生活世界」への愛着を示しているように確かにみえる。先の政治思想の問題と同様、文学批評の問題も、決して一五〇年前の話ではなく、現在の問題である。

それゆえ、一五〇年前の思想や文学運動を過去のものとして捉える歴史学者の立場も、あるいは人間を無視して「客観的」立場を標榜する社会学者の立場（異分野批評家＝構造主義、精神分析学、マルクス主義）も、ベニシュエは受け入れない。彼が受け入れる立場は、文学という独自の領域を受け入れることのできるユマニスム的立場である。この立場は自由主義学説とともに一九世紀の浪漫主義時代の中心的学説をなしたかけがえのない遺産であった。ベニ



シューはこのような方法論やユマニスムという立場は、今日ではあまりはやらないことをもちろん自覚している。その意味で彼の主張と意志は、この時代においては特異であり、ある意味で貴重でもあるといえよう。

おわりに

我々は『預言者の時代』の内容の検討というより（この書の要約などはば不可能に近い）、ベニシュー自身の政治思想と方法論を主に析出しようと試みてきた。方法論に関して言えば、彼は明確な科学論を語っていないが、レイノーが指摘しているように、ベニシューのそれがポパー流の現代実証主義の延長にあるとすれば、彼の方法論は当時としてもさほど独自のものでも、目新しいものでもないといえる。<sup>(13)</sup> また、政治思想についても、留保点をいくつか挙げる事ができよう。例えば、ユートピア思想をあまりに眨めることで逆の危険が伴わないか、つまりユートピア思想とともにあらゆる観念的なのが軽視される恐れがないのかという留保である。<sup>(14)</sup> ユートピア思想というものが現実を批判できるゆえんこそ、そのユートピア性にあるとすれば、それを剥奪することによって観念的なのが現実のう

ちに埋没してしまう危険がある。「自由」という名の下にユマニスムを「非人道的な」人々に押しつけようとする現在の新たな状況のうちにそれを垣間見することもできるかもしれない。

この書が出版されてから三〇年の間に世界の政治的状况は大きく変わり、この書が潜在的に取り組んだ諸問題は一見するとその設定自体アナクロとなり、すでに過去の論争のようになったかにみえる。だが、一九世紀フランス・ロマン主義の再解釈という研究視角はもとより、このような新たな政治状況に対してリベリズムやユマニスムの普遍的価値を歴史的に問い直すという意味においても、二〇世紀という時代をそのまま自らの生涯としたベニシューが立てたこの書のテーマは、二二世紀の現在においてもなお間違いない問うに値するはずである。<sup>(15)</sup>

参考文献及び註

- P. Benichou, *Le temps des prophètes : Doctrines de l'âge romantique*, Gallimard, 1977 は、T.P. と略記し、本文中に頁を示した。その他のベニシューの文献に関しては、註の中で示した。

- (1) 例えば、一九世紀初頭のフランス・ロマン主義と政治思想を包括的に扱った、小野紀明『フランス・ロマン主義の政治思想』(一九八六年、木鐸社)でもこの書への言及はない。
- (2) Entretien avec Yvan Leclerc : 〈Du grand siècle au romanisme〉 in *Mélanges sur l'œuvre de Paul Bénichou*, Gallimard, 1995, p.213
- (3) P. Bénichou, *Le sacre de l'écrivain 1750-1830 : Essai sur l'avènement d'un pouvoir spirituel laïque dans la France moderne*, José Corti, 2e Ed., 1985, p.473
- (4) G. Lichtheim, *A short history of socialism*, Praeger Publishers, 1970, p.44 『社会主義小史』庄司興吉訳、一九七九年、五六〜五七頁)強調はイタリック。
- (5) Entretien avec Tzvetan Todorov : 〈A littérature comme fait et valeur〉 in *Mélanges*, p.170
- (6) シニエールは「イテオロギー」とは諸々の価値を示す精神の運動とさう以上の意味はない。 Cf. *Ibid.*, p. 155
- (7) P. Bénichou, 〈Réflexions sur la critique littéraire〉 in *Variétés critiques*, José Corti, 1996, p.274
- (8) T. Todorov, 〈Présentation〉 in *Mélanges*, p.14
- (9) Entretien avec Tzvetan Todorov, *ibid.*, p.184
- (10) この点については彼自身も認めつつある。 Cf. *Ibid.*, p. 164
- (11) Entretien avec Yvan Leclerc, *ibid.*, p.211
- (12) M.K. Jensen, 〈Méthode et vision〉 in *Mélanges*, p. 141
- (13) Phi. Raynaud, 〈Aux origines de notre culture politique〉 in *Mélanges*, p.116
- (14) Cf. M. Agulhon 〈Esprit, es-tu là ? Réflexion sur *Le temps des prophètes*〉 in *Mélanges*, p.123
- (15) シニエールのビオンヌブローについては、トドロフ自身が編集した『ポール・シニエールの著作について』の論集『ガリマール、一九九五年』所収の「トドロフによる『序文』および死去の三日後に「ル・モンド」紙(二〇〇一年五月一七日)にケシマンが寄せた追悼記事を参照されたい。

〔二〇〇五年 三月三日受稿  
二〇〇五年 四月一九日レヴューの審査  
をへて掲載決定〕

(一橋大学大学院博士課程)